

I これまでの研究について

本校の研究の経過は図1に示すように、大きく四つの時期に分けることができる。

まず、平成16～22年度までは、自閉症児の特性に応じた教育課程の研究に取り組んできた。その後、平成23～26年度までは、子供たちの思いや考えといった内面の育ちに着目しながら、一人一人の実態に合わせた指導の在り方を追求するために、日々の実践をベースにした研究を進めてきた。平成27～29年度までは、それまでの研究の成果を踏まえて、子供たち一人一人が確か

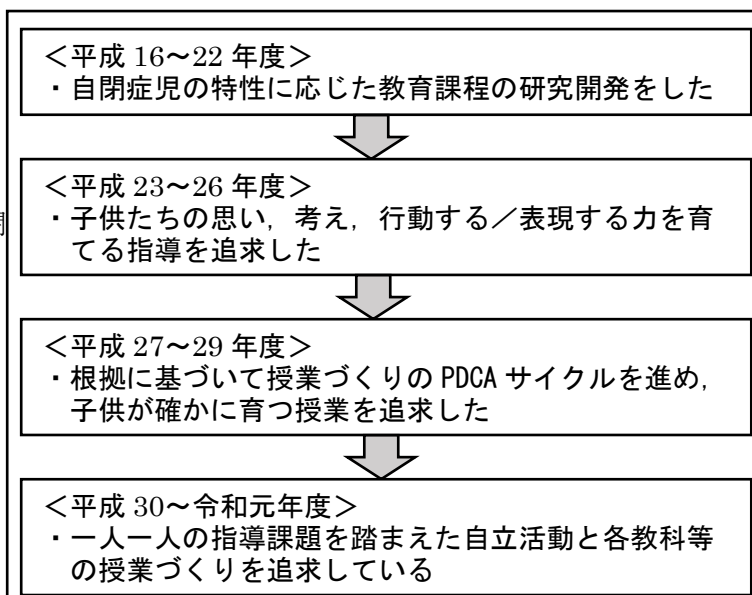


図1 本校の研究の経過

に育つ授業を行うためには、どのような方策が必要であるかを、実践を通して明らかにするための研究に取り組んできた。そして、平成30年度からは、子供たち一人一人の指導課題を踏まえた自立活動の指導と各教科等の授業づくりについての研究を進めている。

II 平成30年度、令和元年度の研究について

平成29年4月に告示された特別支援学校幼稚部教育要領、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領には、自立活動の指導に当たって、子供一人一人の「障害の状態や特性及び発達の程度等の確かな把握」に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、(中略)個別の指導計画を作成することが明記された。このことを踏まえ、各教科等を学ぶための基盤となる力を育てる自立活動の指導を理解することが、子供が確かに育つ指導につながると考え、平成30年度から「一人一人の指導課題を踏まえた各教科の授業づくり」を研究テーマに設定し、自立活動を主としながら教科(平成30年度:音楽、令和元年度:体育)にも焦点を当て、授業実践を積み重ねてきた。

1 自立活動の指導

平成30年度の自立活動の授業づくりでは、子供の学習上又は生活上の困難さから指導課題を導き出すプロセスとポイント、また、授業づくりで大切なことを明らかにした。令和2年度は、幼児児童一人一人の指導課題を明らかにした上で、指導する場・人・時間を明確にした指導計画を立てて指導することで、自立活動の指導を着実に行うことができることを明らかにした。また、そうした指導を行う上で、大切になる学級経営のポイントを整理した。以下、「指導課題を導き出すプロセスとポイント」、「学級経営のポイント」について述べる。

(1) 指導課題を導き出すプロセスとポイント、自立活動の授業づくりで大切なこと

教師が指導課題を導き出すためには、子供の実態から学習上又は生活上の困難さを把握し、その理由や原因を子供の実態に戻りながら導き出すプロセスをたどる必要があることや、それぞれのプロセスの中で押さえておくべきポイントがある。また、自立活動の授業づくりで大切なこととして、「自立活動の時間の指導と他の指導の関連性を図ること」、「子供に合わせた指導方法を見付けていくこと」、「自立活動の評価は、子供の困難さの改善という視点から行う必要があること」の3点が挙げられる。(詳細は「平成30年度 自閉症教育実践研究協議会 実践研究集録」)

(2) 学級経営のポイント

幼児児童一人一人の自立活動の指導を確実にやっていくためには、以下の点を踏まえて、指導計画を立案し、学級経営を行っていくことが大切である。

a) 子供の自立活動の指導内容に応じて、指導の場・人・指導の時間を明確にして指導計画を立案すること

幼稚部や小学部低学年段階の子供への指導では、教師との信頼関係を作るために、教師は子供の気持ちや要求をすぐに受け止め応じていくことが不可欠である。教師が一人の子供とじっくりと関わる時間を設定したり、子供のその時々状態に応じて関わる教師を変えたりすることができるように、子供の状況に応じて変更できる柔軟な指導体制の計画を立てることが大切である。具体的には、学級のどの子供とどの教師と一緒に活動するのか、どの場所でどの教師が誰を指導するのかなど教師の動きを明確にすることで、子供の状態と指導内容に合わせた指導が安全に、確実に実施ができる学級経営につながった。

小学部の高学年段階では、自立活動の時間の指導の中で、教師と一対一で学んだ内容を、学校の授業で発揮するなど、子供が自信をもって様々な場で自分が学んだことを発揮できるように、自立活動の指導目標を明確にした上で、各教科等の指導と関連性を図りながら、指導を行うことが大切である。

b) 教師同士が子供の目標や授業における評価を共通理解して指導を行うこと

子供が日々の学習で獲得したことを、他の生活場面で存分に発揮するためには、学級の教師だけでなく、日頃子供と関わる教師が、子供の課題や変容などを共通理解することが欠かせない。そのためには、日々時間を定めて授業の振り返りをすることや、日案や指導案などに子供の目標や評価を記入し、授業を行う教師同士が互いに確認できるようにすること、学級や学部の教師が継続しやすいように簡易で、記入しやすい、子供の変容等を記録する方法を工夫することなど、子供の今の状態を指導に携わる教師が共有できるような方法を考え、日々、地道に継続していく必要がある。また、そうした方法を継続するためには、教師同士が互いの思いや考えを尊重しながら、率直に意見を伝え合うことができるような関係を作って行くことが不可欠である。

c) 生活年齢に応じて指導の場・人・時間の設定には段階があること

指導の場・人・指導の時間には、生活年齢に応じた段階性があることが示唆された。「指導の場」については、幼稚部段階では、好きな場所や安心できる場所が中心であるが、小学部段階になると、目的に応じた場所や初めての場所などでも指導が行われることがあった。「人」については、幼稚部段階は、身近な教師との関わりが重要であったが、小学部段階になると、他学年の教師や様々な友達といった関わる人が広がっていくように指導が行われていた。「指導の時間」については、幼稚部は遊び中心の生活づくりであったが、小学部段階になると、生活年齢に応じた日課の中で指導が行われることが明らかになった。このように段階性を押さえた指導も大切なポイントであった。

(詳細は「令和元年度 自閉症教育実践研究協議会 実践研究集録」)

2 各教科の授業づくり

音楽の授業づくりでは、これまでの実践を整理することを通して、音楽の授業づくりのポイントを明らかにした。また、体育の授業づくりも同様に、令和元年度の授業づくりの実践を通して、各学級が工夫し、見直してきたことを整理して体育の授業づくりのポイントを明らかにした。以下、「音楽の授業づくりのポイント」、「体育の授業づくりのポイント」について述べる。

(1) 音楽の授業づくりのポイント

(ア) 選曲，編曲，自作曲に関すること

授業のねらいを達成できるように、曲を準備することが大切であった。具体的には、音楽によって生活が豊かで明るくなったり、落ち着いた気持ちを抱いたりすることができるように、子供の興味・関心に合うことや、生活場面や教師や友達と一緒にした楽しい経験などの実体験を表現した曲を作ったりするなど、音楽による子供の生活や気持ちへの影響を考えて、曲を選んだり、自作したりすることが大切である。

(イ) 楽器や教材に関すること

幼児期，児童前期，児童中期では、音の鳴る物にじっくりと触れ、振動を感じ取ったり、自分が触れることで音が鳴ることを十分に経験したりすることが大切である。児童後期では、いろいろな楽器の音の鳴る仕組みを体験的に理解したり、鳴らし方によって音色や音の大きさが変わったりすることなどを聴いて表現したりする力を育むとともに、掛け声を聴いて表現したり、友達の出す音や他の楽器の音を聴きながら楽器を鳴らしたりするなど、友達や教師の鳴らす音に合わせることの面白さや楽しさを味わわせていくことが大切である。

(ウ) 教師の関わりに関すること

幼児期・児童前期は、子供一人一人の表現を教師が見逃さず、受け止め、返していくことが大切である。児童中期は、少しずつ自己表現が現れ始めるが、教師の支えや受け止めがあることで、最後まで表現することができ、満足感や達成感を感じることができるようになる。また、教師自身がリズムの特徴を意識して身体表現や楽器の演奏を行い、子供と一緒にリズムや音楽の楽しさを感じられるように関わるのが大切である。児童後期は、教師自身がリズムや曲想の特徴を意識した身体表現や楽器の演奏を行い、音楽に対する興味・関心を子供にもたせることが大切である。また、児童は自分の表現が認められることにより満足感や自信をもったり、表現する意欲につながったりするため、一人一人の児童の発言や表現を大切にしながら授業を進めていくことが必要である。

(エ) 授業の展開に関すること

幼児期・児童前期は、児童が興味・関心をもてそうな一つの活動にじっくりと取り組み、教師と一緒に楽しめるようになることや、活動の始まりと終わりを意識できるような授業の展開にすることが大切である。児童中期は、児童が好きな話や題材を基に、ストーリーに沿って授業を展開することでイメージしたことを身体表現や発声、楽器などで表現することに楽しく取り組むことができるようにすることが大切である。児童後期は、いろいろな友達や教師の表現に気付き、一緒に音楽活動することの楽しさを感じられるようにすることが大切である。また、自分の表現に自信をもったり、友達の演奏を聴いて友達の表現の良さに気付いたりすることができるように、友達と協力して演奏する機会をもたせたりすることも大切である。

(詳細は「平成 30 年度 自閉症教育実践研究協議会 実践研究集録」)

(2) 運動遊び・体育の授業づくりのポイント

(ア) 教師の関わり方の工夫

教師が目標としている動きができたか、できなかったかという技能面の評価だけでなく、子供が器械・器具に関わるときや動き出すときに考えていることや考えたこと、判断していることや判断したこと、伝えようとしていることや伝えたことなどを見逃さずに評価できるように関わるのが重要である。そのために、子供に質問や提案をするなど問い掛けを増やす、言葉を掛けるタイミングを工夫する、教師自身が楽しそうに体を動かす様子を見せる、子供の試行錯誤の時間に十分に付

き合うことが大切である。

(イ) 教材研究

子供がやりたくなる活動として、子供のできる動きを取り入れ、みんなで一緒に運動することを楽しむことができるようにしたり、子供のイメージできる動きや音楽を取り入れたりが重要である。また、子供が自分から工夫して体を動かすために、器械・器具の使い方を限定せず、複数の使い方をしたり、児童が考えた使い方を取り入れたりと授業を行っていくことが大切である。

(ウ) 子供の再確認

教師が子供に対して感じたり、考えたりしていることと、子供たちが感じたり、思ったりしていることは必ずしも一致していないことを認識して子供の理解や実態把握に努めることが大切である。子供が今もっている力を十分に発揮して、活動に取り組むことができるように、教師は子供一人一人の動きを見逃さずに評価し、認めていきたい。

(エ) 場の設定と安全面の配慮

子供の実態を踏まえながら、器具の選定や配置を工夫し、安全で安心して運動ができる環境作りを行う必要がある。子供の意欲を引き出すために、活動場所の入口側に子供の興味関心のある器械・器具を設置することや、始まりと終わりが分かりやすい直線のコースを作ること、活動の中心部分を決めて、そこを起点とした器械・器具の配置をすること、3名の教師が指導を行うために、3本の直線コースを三角形の形に配置することなど、器械・器具の配置を工夫して指導を行うことが大切である。

(オ) 豊かで意味のある生活づくり

①なじみのあるもの

子供たちの生活の中にあり、なじみのある好きな物を題材にすることで、活動に安心感や期待感をもって取り組むことができるようにすることが大切である。

②子供の興味・関心と他教科等との関連性

子供の興味・関心のあることを題材にして、体育では、器械・器具を使って体を動かしたり、図画工作では、制作活動を行ったり、音楽では、題材に関する曲を歌ったり、楽器で演奏したりするなど、他教科等と関連させて指導をすることで、子供たちは共通のイメージをもちながら、意欲的に活動に取り組むことができるようになっていく。

③共通の生活体験

子供たちが共通のイメージをもちながら、友達や教師と一緒に活動に取り組むことができるように、子供たちの生活体験を踏まえて指導内容を設定することが大切である。

④毎年行われる活動

水泳や運動会など、毎年同じ活動が繰り返されることにより、子供たちは見通しをもって意欲的に活動に取り組んでいた。毎年、同じ時期に、その時期に応じた運動を行うことは、期待感や、新しいことに挑戦したいという思いを抱いて活動に向かうために大切である。

(詳細は「令和元年度 自閉症教育実践研究協議会 実践研究集録」)